

## 平成29年度 第5回（震災後81回）

### 陸前高田市保健医療福祉未来図会議 議事録

テーマ：「 小・中・高校生のはまかだ  
～イマドキ世代のコミュニケーション（居場所）～ 」

日 時：平成29年10月13日(金) 13:30～15:30

場 所：陸前高田市役所4号棟第6会議室

参 加：25名13団体

資 料：下記にアップ

<http://healthpromotion.a.la9.jp/saigai/rikuzentakata.html>

#### 1 挨拶（陸前高田市民生部長兼保健課長 菅野利尚）

本日のテーマは小・中・高校生のはまかだということで、自分にはあまり関係ないと考える方もいるかもしれませんが、陸前高田市の未来を考えるときにとっても重要なテーマである。本日も活発な議論をお願いしたい。

#### 2 内容

(1) はまってけらいん、かだってけらいん運動によるこころの健康づくり事業  
陸前高田市民生部保健課保健師 蒲生恵美

(2) イマドキ世代のコミュニケーション  
陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー 岩室紳也

(3) はまかだ思春期教室の実際  
陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー 佐々木亮平

(4) 参加者のみなさまと「はまってけらいん、かだってけらいん」  
グループワーク

テーマ：子どもたちの居場所づくりに向けて

①みなさんが感じている子どもたちのイメージと課題

②子どもたちが人とつながるためにできること

(5) その他連絡・アナウンス

(1) はまってけらいん、かだってけらいん運動によるこころの健康づくり事業  
(陸前高田市民生部保健課保健師 蒲生恵美)

資料「小・中・高校生のはまかだ～イマドキ世代のコミュニケーション（居場所）」により思春期保健事業について説明。

市保健課では思春期はまってかだつて教室を実施している、対象者は児童生徒及び教員、希望する団体であり、最近では市PTA連合会も関わっている。

上記教室の目的は健康な若者の育成である。具体的にはストレスに直面した時の対処方法を身に付けた若者が対話をしながら他人と協調できる若者、性犯罪の当事者とならない若者を育てることである。

これらの教室において、伝えたいことは若者が性に関する誤解や偏見を解くために必要な知識と、はまってけらいんかだつてけらいん運動、コミュニケーションの大切さである。

本事業に関連したイベントとしては健康のつどいとAIDS文化フォーラムがある。思春期について意外と理解されていない部分もあるので広報りくぜんたかたでも思春期保健事業について説明している。

## (2) イマドキ世代のコミュニケーション

### (陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー 岩室紳也)

思春期というテーマは多くの人が自分の時代が大丈夫だったから子供も大丈夫だと考えてしまう。

思春期の若者にとって、居場所、関係性、依存先が大切であり、思春期でトラブルに巻き込まれる人は絆、ほだしが希薄である。

性教育でいくら情報を伝えても意味がない。対話、関係性、絆を通して伝えなければならない。

眼から入った情報はわかったような気になる。耳から入る情報の方が頭に残り、生きる力が育つ。

「自立は依存先を増やすこと、希望は絶望を分かち合うこと。」という熊谷晋一郎先生の言葉がある。思春期の若者の一部には性、こころ、薬物、ネットといった問題で悩んでいるが、これらの問題の根底には関係性・自己肯定感・居場所・依存先の喪失、コミュニケーション能力の低下が横たわっている。

大学の講義における学生のレポートからわかるのは今の若者の自己肯定感が非常に低いことである。

若者はネットで人とつながっているという錯覚を起こしているが、本当に必要なのは、直接人とつながることである。

こころを病むというのはその人の優先順位、価値観が周囲の人の常識や思慮分別から大きくかけ離れてしまうことである。

若者のストレスの原因は、人と人との関係性の中でプライドが保てなくなり、人とのつながりを遠ざけているところにある。

ストレスに対処できないときには余裕がない状態になる、本当は目標の

ある生活をしたい、関係性、居場所があればそういう生活が可能になる。

若者がはまかだの大切さを学ぶと、自分のうつの原因は挫折それ自体ではなく、誰にも相談できなかつたことが原因だったことに気付く。薬物依存症の原因は他の人への依存不足が原因である。一緒にいたい人とつながっていないと孤独感から何かに依存してしまう。薬物依存の反対は絆、つながりである。

ベトナム戦争に行ったアメリカ人兵士のうち、薬物使用経験者は20%だが、そのうち、95%は禁断症状なく社会に復帰している。

極限状況から、家族や友人のもとに戻ることで、その人たちに依存できるようになり、薬物に依存する必要がなくなった。

### (3) はまかだ思春期教室の実際

(陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー 佐々木亮平)

それでは、どのように、はまかだ思春期教室を実施しているかについて説明する。基本的にはマイク1本で一緒に考えていくスタイルだが、佐々木自身はPowerPointも使わせてもらっている。

一番、伝えたいことは、はまってけらいん、かだつてけらいんの大切さで、ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくりに向けて、それぞれができることを考えてもらっている。

性にかかるイメージはさまざまであるが、このことをオープンに話してもいいのだという雰囲気づくり、キッカケづくりに務めている。

思春期はまかだ教室が始まる前に、動機づけの一環として、事前アンケートを実施し、当日、応える形で双方向のやりとりができるよう工夫している。思春期教室を、自分を振り返り、見つめ直すチャンスになると考えている。

同性愛や性同一性障害など、最近ではLGBTという言葉も広まってきたが、ノーマにからめて、考える時間も設けている。

佐々木自身の経験談を入れながら、地域の人たちとのコミュニケーションの大切さや、失恋の失敗などリアルにつらい経験があることが大事さ、同年代のアンケートの結果などできるだけ、子供たちの感性、言語に近づけるようにと働きかけている。

それでも2次元にはまっていると手を挙げられる生徒も増えてきており、メール、LINE、SNSといったものも否定することではなく、直接、人とつながり、コミュニケーションをとることも一緒にやろうということ伝えていく。

事後のアンケートも自分自身にフィードバックできるよう、自分自身で

考え、行動につなげられる一助になれるようにと実施している。

子どもたちは力を持っていて、こうした投げかけの中から多くのことを感じ、表現してくれる。彼らの中に実は自分の答えのようなものを持っていると信じている。

講演会を遠い日の花火にしないよう、事前の学校の先生方との調整、当日実施後の、学校、家庭、地域のそれぞれのつよみを活かした関わりが大事であると考えます。

そのことを吉野弘さんの詩「生命（いのち）は」が伝えてくれている。一人では成り立たず、でも、緩やかに世界はつながっている、このことの大切さをこれからも伝えていきたい。

#### (4) 参加者のみなさまと「はまってけらいん、かだってけらいん」

##### グループワーク

テーマ：子どもたちの居場所づくりに向けて

①みなさんが感じている子どもたちのイメージと課題

②子どもたちが人とつながるためにできることはまかだ（自殺対策）につながる工夫、仕掛けを考える

資料：みんなではまかだ①～④参照

◆次回（第82回）：平成29年11月9日（木）18：30～20：30

メインテーマ（案）：医療現場から見た陸前高田の健康課題

会場：陸前高田市役所 4号棟3階第6会議室